論　文

校訂　金剛般若経集験記（五）

大東文化大学文学部　山口敦史
国際日本文化研究センター機関研究員・蓮花寺佛教研究所研究員　今井秀和
名桜大学準教授　迫田（呉）幸栄

A revised edition of the Kon-gō-han-nya-kyō-shū-gen-ki (5)

Atsushi YAMAGUCHI
Hidekazu IMAI
Sachie Kure SAKODA

凡例

一　本稿は『金剛般若経集験記』の読みやすい校本を提示することを目的にした。底本は『新纂大日本続蔵経』本。校訂に用いたのは石山寺蔵古鈔本・黒板勝美蔵古鈔本・高山寺本・日光輪王寺天海蔵本である。

一　底本は、『新纂大日本続蔵経』第八十七巻（国書刊行会、一九八八年）所収の本文。この本文は巻末に、「元禄宝永の時代に釈昇堂（一作常）が長寛元年沙門章観の書写本より写し、章暦三年の栂尾高山寺天仁四年の野州日光山本等に校合し、一度は火災にて焼却し終に宝永六年刻せんと至るまでのことを記す」（仏書解説大辞典）という。

一　本文の字体は旧漢字を基本とするが、厳密なものではない。「大意」には新漢字を用いる。

一　対校本である石山寺蔵古鈔本（序文、巻上を収録）は、一九三八年刊行の複製本を参照。黒板勝美蔵古鈔本（巻中、巻下）は一九三五年刊行の複製本を参照。両本は僚本だという。高山寺本は承暦三年書写で、上中下巻をそろえる。現在は奈良国立博物館所蔵。参照したのは同博物館より提供の画像プリント。同博物館のご厚意に心からお礼申し上げます。日光輪王寺天海蔵本は、天台宗典編纂所より提供の画像プリント。日光輪王寺・天台宗典編纂所のご厚意に心から感謝申し上げます。また、既存の文献で、参照できる説話がある場合は、適宜対校に用いた。

一　本文は適宜、句読点・カッコ等を施した。カッコ内で意味をおぎなった箇所がある。各説話ごとに区切り、「校異」と「大意」を掲載した。

一　本文は変更した箇所についてのみ記す。

（例）　大（石高）―入

底本には「入」とあるが石山寺蔵古鈔本・高山寺本により「大」と改める。

隋（改意）―随

底本には「随」とあるが私案により「隋」と改める。

一　対校本の略称は以下の通り。

石山寺蔵古鈔本――石

黒板勝美蔵古鈔本――黒

高山寺本――高

日光輪王寺天海蔵本――日

『法苑珠林』（周敍迦・蘇晋仁校注、中華書局、二〇〇三年）――珠

『太平広記』（中華書局、一九六一年）――広

このほかの文献はその都度表記する。

一　本稿は山口・今井・迫田（呉）の共同制作である。資料整理は堀井瑞生が担当した。

【参考文献】
小林芳規「唐代説話の翻訳―『金剛般若經集験記』の訓読について」（『日本の説話7 言葉と表現』東京美術、一九七四年）
築島裕「日光輪王寺天海蔵金剛般若経集験記古点」（「書誌学」復刊六号、一九六六年十一月）
呉光嫣「『金剛般若経集験記』研究」（金知見・蔡印幻編『新羅佛教研究』山喜房佛書林、一九七三年）

（本文）

『金剛般若経集験記』巻下

功德篇第五（并序十章）　誠應篇第六（并序十章）　　梓州司馬　孟獻忠　撰

功德篇第五（并序十章）

夫至功非功、爲而不宰、上德非德、成而不居。故九定四禪、入無所入、三空六度、行無所行。莫而無邊、非相非名、不染不住。積恒沙之身、不能方四偈之德、神功聖德、其大矣哉。故爲功德之篇、以勸來者。

（校異）

なし

（大意）

そもそも功を立てようとして功を立てられないのは、きちんとやろうとしてできないことである。徳を尊ぶつもりでも徳に背いてしまうのは、成し遂げようとしてそれをつとめられないことになるのである。

よって、「九定」（九種の禅定）と四禅（四段階からなる瞑想）は、（その境地に）入ろうとしても入れず、三空（三解脱門のことか）・六度（六種の実践修行）の境地にいたるための修業は、（それを）行じようとしても実践できないのである。茫漠として果てしなく、すがたもなく名辞もなく、けがれもなくとどまることもない。この身体に、ガンジス川の砂のように数限りないくらいの（修行を）積み重ねれば、四句の偈の持つ徳

に向かうことができなくても、神妙な功績を持つ高い徳により、その霊験は偉大なことである。よって、功徳の篇をなして、来る者に勧める。

1　趙文昌

（本文）

蕭瑀金剛般若經靈驗記曰、隋開皇十一年、太府丞趙文昌身死、唯於心上氣暖、時昌家人未敢入斂。被人將來至閻羅王所、王問昌云、「一生已來、作何福業。」昌報王言、「一生家貧、無餘功德。專心唯誦金剛般若經典。」王聞此語、合掌恭敬、贊云、「善哉善哉。受持金剛般若、功德甚大、不可思議。」王語所執昌使者、「好須勘校、莫錯將來。」其典執案諮王、「實錯將來、此人更合二十餘年。」王聞此語、自檢非謬。卽語昌云、「汝共使者、向藏內取金剛般若經來。」卽遣一人、引昌西南行可五六里外、至經藏所。見數十間屋、屋甚精麗。經卷遍滿、金軸寶帙、莊嚴華飾、不復可言。昌乃一心合掌、閉目信手抽得一卷、大小還似舊誦般若者、其題目功德最爲第一。昌便恐怕、慮非般若、求此使人請換、不肯。昌卽開看、乃是金剛般若。將至王前、王令一人執經在西、昌在東立。王勑使人取七寶牀几、遣昌坐上、向西誦經。竝得通利。時王敎昌還家、仍約束昌云、「受持此經、慎莫廢闕。」亦令勸化一切人、讀誦此經。仍令一人引昌、從南門出。乃見周武帝禁在門東房內、卽喚昌言、「汝是我本國人也、暫來至此、須共汝語。」昌卽就之、向武帝再拜。武帝問云、「汝識我不。」昌言「臣昔宿衞陛下。」武帝語昌云、「卿乃是我故舊、汝可還家、爲我具向隋帝論說、導我諸罪竝了、唯有滅佛法事未了。當時有衞元嵩敎我滅佛法、爲追元嵩至今不得、以是未了。」昌問武帝、「元嵩何處、追不可得。」武帝云、「其元嵩者、三界外人、非閻羅王之所管攝、不能追得。汝還爲我速從隋文帝乞少功德。」昌行少時、出南門外。見大糞聚中、有一人頭髮纔出。昌問引人、「此是何物。」引人答云「此是秦將白起枉坑趙卒、寄禁未了。」昌還家得蘇已、經三日其患漸差。具奏隋文帝。帝卽出勑、國內諸寺、普爲周武帝三日持齋、轉金剛般若經。勑令錄入隋史。

（校異）

已（黒）―已
遍（黒日）―徧
有（黒日）―右
已（黒）―已

（大意）

蕭瑀『金剛般若経霊験記』所収の話である。隋の開皇十一年（五九一年）に、太府丞の趙文昌は死んだが、ただ心臓のあたり（胸のあたり）が暖かく、その時に趙文昌の家族は（彼を）棺に納め埋葬することを恐れて、できなかった。

人（使者）に閻羅王のところに連れてこられると、王が趙文昌に聞いて言った。「生涯これまで、どんな福業を作ったか。」趙文昌は王に返事して言った。「一生、家が貧乏で、功徳など残しておりません。ただ一心に『金剛般若経』を読んでいました。」王はその言葉を聞き、合掌し恭敬して次のように言った。「よしよし。『金剛般若経』を受持したことの功徳は甚大であり、言葉にできないほど素晴らしい。」王は趙文昌を捕らえた使者に語って言った。「もう一度確かめた方がいい。間違いがあってはいけない。」係は書類（文書）をとり、王に諮った。「実に間違いでございました。この者には、さらに二十年余り寿命があります。」王はその言葉を聞き、自ら点検して、（彼の言葉が）間違いでないことを確かめた。（そして）すぐさま趙文昌に語って言った。「お前は使者とともに、蔵に向かい『金剛般若経』をとってくるように。」

すぐに一人（の使者）を遣わすと、（使者は）趙文昌を案内して、西南（の方向）に五六里行ったところで、お経をおさめる蔵のところに至った。十数軒の建物があって、非常に華美だった。（部屋の）至る所にお経や巻物が満ちていて、金の軸に珍貴な帙、（すべてが）荘厳かつ華麗な飾りで、とても言葉では言い表せない。趙文昌は一心に合掌して目を閉じ、手当たり次第に一巻を手に取ると、大きさが昔から読んでいた『金剛般若経』とちょうど似ていた。（しかし）その題目は功徳がもっとも最初だった。そこで、趙文昌はもしかするとこれは『金剛般若経』ではないのではないかと恐れ、使者に取り替えを依頼したが、断られた。趙文昌が開けてみると、まさに『金剛般若経』だった。王の前に至ると、王はお経を持った一人を西に立たせ、趙文昌を東に立たせた。王は人に七宝の机と椅子をとりに行かせると、趙文昌を（それに）座らせ、西に向かってお経を読ませた。（そして）どちらも等しく道理を悟った。

（やがて）王が趙文昌を家に戻す時が来ると、趙文昌に約束させてこう言った。「『金剛般若経』を受持し、決してやめることのないように。」さらに一切の人々を勧化し、『金剛般若経』を読ませることを命じた。そして一人（の使者）に命じると、（使者は）趙文昌を引導して南門から出た。そこで、門の東にある部屋に閉じ込められている周武帝（北朝北周の第三代皇帝。五六〇―五七八年在位）。を見た。（周武帝は）すぐに趙文昌を呼んでこう言った。「お前は私の国の者であろう。少しの間（お前は）ここに来て、ともに語る必要がある。」趙文昌はそれに従い、周武帝に再び礼拝した。武帝は彼にたずねて、こう言った。「お前は私のことを知っているか。」趙文昌はこういった。「臣下は以前、陛下を宿衛したことがあります。」周武帝は趙文昌に語って言った。「お前は私の旧知であり、お前は家に戻ることが許された。私のためにつぶさに現皇帝である隋文

帝に説明せよ。私をここに来させた諸々の罪（の償い）はみな終了したが、仏法を滅したことだけが未だ終わっていない。当時、衛元嵩（という者）がいて、私に仏教の廃止を指示した。ゆえに、いままで衛元嵩を追ったが、捕らえられないために未だ終わっていない（のである）。」趙文昌は周武帝にたずねた。「衛元嵩はどこですか。どうして追っても捕らえられないのですか。」周武帝はこう言った。「その衛元嵩という者は、三界の外にいる人で、閻魔王の管轄ではないために追跡できない。お前が戻ったら、すぐに我らのために隋文帝に功徳を修めるように頼んでほしい。」

趙文昌は少し行ったところで、南の門を出た。大きな排泄物の塊のなかから、一人の頭髪が僅かに出ているのを見た。趙文昌は引導の人にたずねた。「これは何ですか。」引導の人が答えて言った。「これは、秦の武将である白起（公孫起。戦国末期～二五七年）で、趙軍を生き埋めにしたので、禁固が未だ終わっていない。（公孫起は「長平の戦い」で四十万余りの俘虜を生き埋めにした）」

趙文昌は家に戻り生き返ると、三日を経過したところで体調が漸くよくなり、つぶさに隋文帝に報告した。隋文帝はすぐに命令を出し、国中のすべてのお寺が、みな周武帝のために三日間持斎した。（そして）『金剛般若経』を転読した。（皇帝の）命令により（このことは）隋の史書に記録された。

2　趙文若

（本文）

又曰、隋時雍州趙文若、死經七日、家人欲斂入棺、乃縮一脚、遂卽不斂、便得蘇活。語言死見閻羅王、問若、「生存作何福事。」若言、「受持金剛般若經典。」王言、「善哉善哉。此是最大第一功德。汝雖脩福、且將示其受罪之處。」仍令一人引若北行、可數十步、至一牆、有孔、隔牆孔中有人、引手捉若、挽度極大辛苦。牆外見大地獄、鑊湯鑪炭、刀山劒樹、銅柱鐵牀、罪人受苦不可思議。乃有雞肫豬羊鵝鴨之屬、從若債於本命。若語云、「不負汝命。」雞等報云、「汝往某年某月某日、共某州人分我頭脚、各各食之。」若聞畜生所說所證、始知不虛。亦記往日殺食之處、唯知念佛、以一心悔過。其豬羊雞鴨、不敢更言。所引之人、將若迴王所。啓王云、「見受罪處訖。」王爾時乃付一椀鐵釘、令若食之。竝用長釘五枚［音梅］、釘若頭頂手足、具令放去。若卽蘇、已後仍患頭痛、并手足疼。所痛之處、漸得瘳愈。若從爾已來、精勤不懈、受持般若。但見諸親知識、悉勸受持此經。若後因於公使、至驛廳上、暫時偃息、如似欲睡夢、見有一青衣婦人、急速來告、「救命救命。」若忽驚覺、卽喚驛長問言、「汝不爲我殺他生命。」驛長報云、「適欲爲公殺一小羊。」問是何色、報云青色牸羊。若令速放莫殺、仍與價直贖羊、放爲長生。豈非受持金剛般若、精誠致感然也。

（校異）

已（黒）―巳
已（黒）―巳
但（日）―但

（大意）

また別の話である。隋の時、雍州の趙文若は、死後七日が経ち、家族が棺に死体を納めようとしたところ、片足を縮めたので、その場で（棺に納めるのを）とりやめると、生き返った。言葉にして語ったのは、死んで閻羅王に会い、閻羅王が趙に聞くことには「生前に何かいいことをしたか。」趙文若は答えた。「『金剛般若経』を受持していました。」閻羅王は言った。「よしよし。このことは最大で第一の功徳である。お前は福を修めたが、なお、罪をうけるところを示しておこう。」

そして（一人の）使いに命じて、趙文若を北の方向に案内し数十歩を歩いたところ、ある壁に至ると穴があり、壁に隔たれた反対側に人がいて、手を伸ばして趙文若を引っ張った。それを逃れるのはとても大変であった。壁の外は大変な地獄だった。湯鑊という刑具によって茹でられたり、湯鑪という刑具によって焼かれたり、刀でできた山と刃物を枝にした木々や、銅の柱や鉄の床（で責められる）など、罪人がうける苦痛は実に凄まじかった。（そこでは）鶏（ニワトリ）、肫（砂肝）、豬（ブタ）、羊、鵝（ガチョウ）、鴨の類が、趙文若に命を奪われた（と訴えた）。趙文若が語って言うには、「お前（たち）の命を奪ったことはない。」鶏などが返事して言うには、「お前は過去の某年某月某日、ある州の人と私の頭、足を分け合って、それぞれ食べた。」趙文若は畜生の話と証拠を聞き、嘘偽りないことを初めて知った。また以前に殺して食べた場所を思い出し、ひたすら念仏をし、一心に反省し悔やんだ。豬、羊、鶏、鴨はそれ以上（何も）言えなかった。

案内の人が、趙文若を閻羅王のところに連れ戻した。（そして）閻羅王に報告していった。「罪をうけているところを見せました。」閻羅王はそのとき、一杯の鉄の釘を与え、趙文若に食べるように命令した。また、長い釘五本を使って、趙文若の頭のてっぺんや手足を刺した。（閻羅王は）命令を述べて趙文若を解放させた。趙文若は生き返り、その後、頭痛や手足の痛みを患った。痛いところは段々よくなった。そのとき以来、勤めてやめることなく『金剛般若経』を受持した。親戚や知り合いには、一律に『金剛般若経』を受持することを勧めた。

趙文若はその後、公務のために駅にいた。短時間の休息中に眠ってしまい、夢を見たようであった。ある青い服を着た女性が急いで告げに来た。「助けて。助けて。」趙文若は急に目が覚め、すぐに駅長を呼んで尋ねた。「お前はわたしのために殺生しようとしていないか。」駅長が答えていうには、「ちょうど、子羊を一頭殺そうとしているところです。」（それは）何色かと尋ねると、返事して言うには青色の子羊だった。趙文若はすぐに、殺さないように命令を出し、同じ金額で羊を買い取って、放して生かした。このことは『金剛般若経』を受持したゆえにできたことでは

なかろうか。誠に感心すべきことである。

3　栖玄法師

（本文）

郎餘令冥報拾遺曰、普光寺栖玄法師、少小苦行、常以講誦金剛般若經爲業。龍朔二年冬十一月、於寺內端坐遷神、儼然不動。天子聞而嘉之、下制曰、「普光寺僧栖玄、德行淳脩、道俗欽仰。奄然坐化、釋衆摧梁、宜以三品禮葬。」仍給鼓吹一部。傾城士女、觀者如市焉。［餘令當在京都見諸大德及親友共說］

（校異）

なし

（大意）

郎餘令の『冥報拾遺』所収の話である。普光寺の栖玄法師は、若い頃から苦行を行い、常に『金剛般若経』を読むことを業としていた。龍朔二年（六六二年）の冬十一月、寺内にて端座したまま亡くなり、厳然として動かなかった。天子（皇帝）はそれを聞くと褒め称え、葬儀について指示を下し、こう言った。「普光寺の僧侶、栖玄は道徳と品行が実に善行と美しさに満ちており、僧侶も俗人も、みな尊敬し慕っていた。突然、結跏趺坐したまま死んだので、仏教徒にとっては（まるで）大きな柱を失ったようなものであり、三品の位に準じる葬儀を執り行うべきである。」ゆえに鼓吹（鼓吹司。宮殿に仕える楽隊）一隊を遣わした。城内の男女が見に来ることは、まるで市場のようだった。［郎餘令が都にいた頃、出会った諸大徳および親戚・友人みな、同じことを話した］

4　高純

（本文）

又曰、翊［音翼］衛高純、隋僕射齊公穎之孫、刺史表仁之子也。龍朔二年在長安、出順義門、忽逢二鬼、各乘一馬、謂曰、「王令召卿。」言是生人、弗之信也、乃策馬避之。二鬼又馳•摧之、令一騎至普光寺門待、仍相謂曰「勿令入寺、入寺訖、恐不可得。」卽過、仍•摧之向西、又至開善、會昌二寺、亦並如之。有兄弟於化度寺出家、意欲往就。及至寺門、鬼又不許。於是擒之、純乃毆鬼一下、鬼等大怒、曳其落馬、因卽悶絶。寺門有

僧、見其但自落馬、其側更無一人。乃輦入其兄弟房、經宿遂得蘇也。既蘇之後、具自陳述。說云被引見王、王云此人未合卽來、乃令其生受、以曾謗議衆僧、遣犁其舌、舌遂長數寸、而無所傷。人問之曰、「何因舌長而無損處。」答曰、「以曾誦金剛般若經、所以不能損也。」經宿而罷。後又以手向口、如呑物之狀。須臾卽於領下發赤色一道、流入腹中、因卽僵仆、號叫而絶如此日常數四。人問其故、對曰、「爲幼年時盜食寺家菓子、所以呑鐵丸也。」凡經二旬而罷、其後遂乃練行、迄今不食酒肉。［餘令時赴考入京親自聞說］

（校異）

摧（改意）―擁

摧（改意）―擁

（大意）

また別の話である。翊衛である高純は、隋の時の僕射（官名）であった齊公、（高）穎の孫にあたり、（新州）刺史、（高）表仁の子である。龍朔二年（六六二年）のこと、長安にいて順義門を出たところ、突如として二人の鬼と出くわした。（鬼は）それぞれ、馬一頭に乗っていた。告げて言うには、「（冥界の）王からの命令でお前を召喚する。」知らない人が話しているので、まったく信じずに馬を駆って逃げた。

二人の鬼はさらに追いかけてきて行く先を防ごうとした。一騎が普光寺門に行った時、そこで（もう一騎に）向かって言うことには、「寺には入らせるな。寺に入ってしまうと、捉えることができなくなるだろう。」（そこを）過ぎると（ふたたび）行く手を阻み、（高純を）西（の方向）に向かわせた。また、開善、會昌という二つの寺に至ったときも同じだった。友人（知り合い）が化度寺に出家しているので、（高純はそこへ）行こうとしていた。寺門に至った時、鬼がまたこれを許さなかった。（高純を）捕まえようとしたところ、高純が鬼を一撃した。鬼らは激怒し、彼を引っ張って落馬させると、それが原因で気を失った。

寺の門に僧侶がいて、彼がただ自ら落馬したのを見ていたが、その側には誰一人いなかった。（僧が）彼を友人の部屋に運び入れると、一晩過ぎて目を覚ました。目を覚ましたら、つぶさに述べて説明した。（高純が）言うには（冥界の）王に対面するよう、連れて行かれた。（しかし）王は、この人はまだ来るべきではないと言って、彼を罰しようと令を出した。（高純が）かつて僧侶を悪く批判したこともあるゆえ、舌を犂で責められた。ゆえに舌が何寸も伸びたが、無傷だった。人がこれを聞くことには、「なぜ舌が伸びたのに、傷はなかったのか。」答えて言うには、「かつて『金剛般若経』を読んでいたゆえ、傷付けられないのだ。」（こうして）一晩経って終わった（のである）。

その後、手を口に当て、まるでものを飲み込んでいる様子であった。すぐさま頸部下（くびした）から赤いものが一筋あらわれ、腹部に流れて

いった。そのせいで、すぐに倒れ、絶叫し意識を失う。こうやって日に四回ほど繰り返していた。人にその理由を聞かれて答えて言うには、「幼少期に寺の菓子を盗み食いし、ゆえに鉄球を飲み込んでいるのだ。」全部で二十日間を経て終った。その後、仏道修行を熱心に励み、今に至るまで酒を飲まず、肉を食さずにいる。［郎餘令が試験に出向いて都に入ったとき、自ら聞いた話］

5　石壁寺老僧

（本文）

又曰幷州石壁寺有一老僧、禪誦爲業、精進練行。貞觀末、有鴿巣在其房屋楹上、哺養二雛。僧毎有餘食、恒就巣哺之。鴿雛後雖漸長、羽翼未成、乃並學飛、墜地而殞、僧並収瘞之［焉爵反］。經旬之後、僧忽夜夢二小兒、白之曰、「兒等爲先有少罪、遂受鴿身、比來聞法師讀誦法華經、及金剛般若經。卽聞妙法、得受人身。兒等今於此寺側十餘里某村某姓家、託生爲男、十月之外、當卽誕育。」僧乃依期往視、見此家一婦人同時誕育二子、因爲作滿月齊。僧呼鴿兒、兩兒並應曰、「諾。」後歲餘始言。［賈祗忠先爲幷州博士、遷任隰州司戶、爲餘令言之、後於幷州訪問、並稱實錄］

（校異）

なし

（大意）

また別の話である。并州の石壁寺に、とある年の老いた僧侶がいて、座禅して経文を読むことを日課にし、精進、練行していた。貞觀（六二七―六四九）の末、ハトが彼の部屋の梁の上に巣を作り、二羽のひなを育てていた。僧は毎回食べ残しがあれば、いつも巣に近づき、食べさせていた。ハトのひなは段々大きくなり、翼がまだ生えそろわないのに、飛ぶことを真似したところ、地面に落ちて死んだ。僧は（これを）拾って埋葬した。

十日が過ぎたあと、突然、僧の夜の夢に二児が現れた。（二児は）説明してこう言った。「われわれは以前、小罪を犯したために、ハト（の身）になった。これまで法師が『法華経』および『金剛般若経』を読誦しているのを聞いていて、妙法を聞き得たために、人間に生まれ変わることが出来た。我々は今から、この寺から十数里の、ある村のある家（ある名字の家）に、男児として生をうける。十ヶ月後に生まれる。」

僧が言われた通りの時期に見にいったところ、その家の奥さんが二人の子を同時に産んで育てていた。ちょうど満月斎（生後一ヶ月の赤ん坊のお披露目行事）だったので、僧がハトちゃんと呼んだら、二児は同時に「ハイ」と返事した。その後、一年過ぎてから初めて（普通に）しゃべっ

た。［賈祗忠（という人）は、もと并州博士であったが、隰州司戸に遷って郎餘令にこのことを言い、後に郎餘令が并州に訪問して、かつ実話として記録した。］

6　于昶

（本文）

慶州司馬禽昌公于昶、昔任荊府錄事、每至一更已後、卽喘息微惙、擧身汗流、至雞鳴時卽愈、亦更無所苦。但覺形體羸弱、心神憂悴。左右怪而問之、公默而不應。夫人柳氏請召醫人、公不許之。夫人因密問其故、答云、「更無他疾、但苦晝決曹務、夜判冥事耳。」夫人因訪以冥間事、但言、「善惡報應、皆如影響。」餘無所言。夫人因問、竟亦不答。然每有未萌事、咸預知之、卽陰爲之備、終不曉說。雖兄弟妻子、不之告也。凡五六歲、甚覺勞苦。其後丁龍城夫人憂、卽誦金剛般若、由是不復更爲冥吏。因極言、「此於諸經中、福力爲最。」遂命子孫持誦經焉。公年未知命、卽稱疾歸田。時左相蘇良嗣、右相韋待價、大將軍李沖玄、並是公姻媾親昵［女栗反］、嘗請公入仕、公固辭不行。于時酷吏用事、多所誣陷。公雖退就丘園、而婚連權貴、遂被不逞之輩誣告。相仍公雖頻處狴［音陛］牢、了無憂憚、晝夜誦讀、未嘗絕聲。不逾數朝、果得清雪。他皆倣此、不可屢陳。中外驚嗟、咸共歎怪。公年八十有四、遘疾將薨、猶誦經不已。屬纊之日、神情朗然、俄而有異香滿室、氤氳芳馥［音伏］、代所未聞。公自言有化人來迎、當往西方淨境。因與親戚訣別、言訖而終。［其孫梓州郪縣尉于慤親自說也］

（校異）

已（改意）―巳
時（改意）―明
但（日）―但
已（改意）―巳

（大意）

慶州司馬の禽昌公たる于昶が、以前、荊府録事に勤めていたときのこと。毎晩一更（初更。夜七時か八時以降の二時間）が過ぎた後、あえぐ息が微妙に止まることがあった。全身に汗をかき、鶏が鳴く頃になると回復する。それほど苦しくはなかったが、しかし、見た目も肉体も衰弱し、精神状態もよくなかった。周りの人がおかしいと思い、尋ねても、于昶は黙って答えようとしない。夫人である柳氏が医者をお願いして呼ぼうと

しても、于昶は許さなかった。

夫人が密かにそのわけを聞いたところ、答えて言うには、「ほかに病気を患っているわけではないが、ただ、昼間は曹務を処理し、夜は冥府の公務をこなすのが苦しいのだ。」夫人が冥界のことを尋ねると、たった一言、「善と悪の報いは、みなそれなりの道理がある。」と。それ以上何も言わなかった。夫人がさらに聞いても、ついに答えなかった。しかし毎回まだ発生しない出来事をすべて予知でき、ゆえに陰で準備し、終始明かさなかった。兄弟、妻、子であっても、告げなかった。全部で五、六年、非常に辛く感じるようになった。

その後、龍城夫人の葬式があったので『金剛般若経』を読誦していたところ、冥府でのお勤めをふたたびすることがなくなった。ゆえに力説して言った。「これ（『金剛般若経』）は諸々のお経のなかで、もっとも福の力がある。」それで、子孫に『金剛般若経』を誦持するように命じたのだ。彼（于昶）が知命（五十歳）になる前に、病気と称して田舎へ戻った。そのときの左相である蘇良嗣、右相である韋待價、大將軍の李沖玄、みな、彼の姻族、非常に親しい人々で、かねて彼（于昶）を官職とするように要請していた。彼（于昶）は固辞して行かなかった。

当時、酷吏が政権をとり、あちこちで無実の人を罪に陥れていた。彼（于昶）は官職から退き、隠居していたにも関わらず、権貴（権力があり身分の高い人）と姻族であったため、ついに不逞の輩に誣告された。続いて、彼が度々牢屋に入れられていたにも関わらず、まったく憂いも恐れもなく、昼夜（『金剛般若経』を）誦持し、声を絶やすことはなかった。数日が過ぎないうちに、はたして潔白を得たのである。ほかのみなも真似て、それ（『金剛般若経』の読誦）をやるが、繰り返しても並ぶことがなかった。みな驚き呆れ、みな共々がその不思議に感嘆した。

彼（于昶）は八十四歳になり、病を患い、瀕死になっても、なお『金剛般若経』を読誦し続け、止むことがなかった。死ぬ日は表情や態度が明るくはっきりとしていた。あまり立たないうちに、異香（すぐれたよい匂い）が部屋中に充満し、芳醇とした香気が絶えず、（このようなことは）かつて聞いたことがなかった。彼（于昶）は自ら、化人（仏の使い）が迎えに来て西方浄境（極楽浄土）に行くと言い、一同と訣別して言葉を終えた途端に死んだ。[その孫、梓州、郪県尉于恕が自らこの話を説いた。]

7　魏恂

（本文）

中宗時、京師有人死、經數日而蘇。說於冥官前、被經訊鞫。須臾有追事人至、冥官責以所追人不獲、將欲鞭之。追事者抗聲訴曰、「將軍魏恂、受持金剛般若經、常誦不輟、善神擁護、圍繞數重、無由取得、實不寛縱。」冥官遂使驗覆、如追事者之詞、因此罷追、同聲贊美。魏恂者、鉅鹿人也。父尚德、清直儉素、好學不倦、尤精釋典、亦誦持此經。天授年中、終於左庶。子恂克傳父業、解褐授愽州參軍。屬琅玡王作亂、柳授僞郎將、令拒官軍。忠孝憤激、背逆歸順、晝伏夜走、不由軌路、遂得至都。是日召見面授五品、除愽州司馬、便令討平愽州。召入遷尚衣、奉御出入中外、

累踐文武。神龍初加三品、拜右監門將軍、出爲睦州刺史。坐以公事、降授徐州別駕。［梓州司士鄭叔鈎說］

（校異）

なし

（大意）

中宗（唐の第四、六代皇帝。六八四および七〇五―七一〇在位）の時代に、都である人（魏恂）が死んだ。（彼は）数日たって蘇生した。（そして）冥界の官吏の前で、きびしい取り調べにかけられた経験を（次のように）説いた。（死んでから）ややあって、ある追跡者が来た。冥界の官吏は、どうしてその追跡した人を捕らえられなかったか（と言って、追跡者を）責めた。（そして）鞭で打とうとした。追跡者は声を上げて抗議すると、こう訴えた。「将軍魏恂は『金剛般若経』を受持し、常に止むことなく読誦していました。善神は（彼を）擁護し、敬意を持って幾重にも取り囲んでいます。（彼を）捕らえる術がないのであって、実に手を緩めていることなどありません」と。冥界の官吏がとうとう調査の役人を遣わしたところ、追跡者の言葉の通りであり、このことによって刑罰を免除したので、声をそろえて賛美した。

魏恂は鉅鹿の人である。父は尚徳、（性格は）清廉にして質素、学問を好み、飽きることがなく、とりわけ仏教経典に詳しく、またその仏典（『金剛般若経』）を誦持していた。天授年中（六九〇―六九二）、最後は左庶となり、（その）子である恂はよく父の事業を伝え、（仏教の）褐を理解し博州参軍属を授けられた。琅琊王氏が反乱を起こし、柳は偽りの郎将を授けられて、（琅琊王氏は）官軍を拒むことを命じた。（魏恂は）忠孝の心から憤激し、謀反して帰順に背いた。昼間に寝て夜に遁走し、道に沿って行かず、ついに都に到着することができた。この日、（中宗は魏恂を）呼び寄せて対面し、五品の位を授け、博州司馬をとり除くために命を下して、博州を討伐に行かせた。（中宗は）招き入れて尚衣奉御に遷し、宮廷の中と外を（自由に）出入りし、文武に長じていた。神龍（七〇五―七〇七年）のはじめに三品の位を追加され、右監門将軍を拝し、転出して睦州刺史となった。公務の座について、退職してから徐州別駕の位を授かった。［梓州司士の鄭叔鈎、つぶさにこれを説く］

8　張玄素

（本文）

蘄州［音其］黄梅縣令張玄素、年二十、卽受持金剛般若經。每家有迍厄疾病、卽至心祈請、卽福助肸［許乙反］蠁、皆得痊濟。年七十有餘、洛城東十餘里、於故城庄染疾。將終之際、遂見香華幡蓋、自空而來。合掌欣然、卽澡浴裝飾、擧家同聞香氣、連日不歇。［前梓州通泉縣丞柳峻說］

（校異）

なし

（大意）

蘄州黄梅県令の張玄素の年齢は二十歳、常に『金剛般若経』を受持している。重篤の病気がある家ごとに、請われればすぐに真心より祈祷し、するとたちまち福徳の助力があまねく広がって、みな治癒してしまう。七十数歳（の頃）、洛陽城の東十数里にある故城庄にて伝染病があった。（張玄素は）いままさに臨終の時、とうとう妙なる香りのする幡（幢幡）と蓋（天蓋）が、空からやって来たのを見た。合掌して喜び、身体を洗い清め装飾すると、家じゅう同じような香気を嗅ぎ取ることが、連日尽きなかった。［前梓州通泉縣丞の柳峻の話］

9　薛嚴

（本文）

鄂［音愕］州司馬薛嚴、受持金剛般若經、淨信堅固。及至亡時、年七十已上。有幢蓋簫管、乘空而迎。其夫人見、隨幡蓋而去。寢疾彌困、夫人遙於空中喚之、飄若乘雲冉［音染］冉雲遐上、香氣不絶、合家共聞。因而遂終、斯亦不思議事。［同前柳峻説］

（校異）

なし

（大意）

鄂州司馬の薛嚴は『金剛般若経』を受持し、清らかな信心によって堅く身を保っていた。亡くなる時の年齢は七十歳以上だった。幡（幢幡）と蓋（天蓋）、たて笛が、空を飛んで迎えに来た。夫人がこれを見ると、幡と蓋はともに去って行った。病臥のもと、ますます苦しんでいると、夫人がはるか空中に向かってこれを喚ぶと、（薛嚴は）飄然として雲に乗るようにどんどんはるか上空に昇り、香気は絶えることがなかった。集落（の者たち）は皆、その香気を嗅いだ。よって、これで命が終わった。これまた、すばらしいことである。［前と同じく柳峻の話］

10　姚待

（本文）

梓［音姉］州鄞［音妻］縣人姚待、誦金剛般若經。以長安四年丁憂、發願爲亡親自寫四大部經、法華、維摩各一部、藥師經十卷、金剛般若經百卷。寫諸經了、寫般若經得十四卷。日午時、有一鹿突門而入、立經牀前、擧頭舐案、舐案訖、便伏牀下。家有狗五六箇、見鹿搖尾、不敢輒吠。姚待下牀、抱得亦不驚懼。爲受三歸、跳躑屈脚、放而不去。至先天年中、諸經並畢、皆以養裹、將欲入函。有屠兒李迴奴者、不知何故、忽然而來。立於案前、指經而笑。合掌而立、欲得取經。其屠兒口噁耳聾、兩眼俱赤、躭酒凶惡、少有此徒。所寫之經、皆以瑠璃裝軸、唯般若經、飾以檀素、但簡取素軸。明此人於般若有緣、待遂裹以白紙、盛以漆函。屠兒手所持刀横經函上、笑而馳去。一去之後、不復再見、莫知所之。至開元四年、有玄宗觀道士朱法印、極明莊老。往眉州講說、歲久乃還。時、鄉中學士二十餘人、相就禮問。友人王超曹府、令竪子殺羊一腔、以袋盛肉。煮熟之後、心知其殺、但忍饞不得、卽隨例喫、計食不過四五臠。經于一日、至日昳［田結反］時、欻然肚熱頭痛、支節有若割切。至黄昏際、困篤彌甚。耳聞門外有喚姚待之聲、心雖不欲出看、不覺身以出外。問有何事。使人黄衣、狀若執刀之刺史、喚言訖便行。待門外有溪、當去之時、亦不見溪澗、但見平坦大道、兩邊行樹。行可三四里、見一大城、云是梓州城。其城複道重樓、白壁朱柱、亦甚秀麗。更問使者、此不是梓州城。使人莫語。城有五重門、其門兩邊各有門屋、門門相對。門上各各題額、欲似篆書、不識其字。門數雖多、一無守者、街巷並亦無人。使者入五重門內、有一大廳、廊宇高峻、廳事及門並無人守。至屏墻外、窺見廳上有一人、著紫、身稍肥大、容色端麗、如三十已下。使者入云、「追姚待到。」待走入遙拜。怒目厲聲、「何因勾攣爾許人、殺人於淨處喫。」思量莫知其事。但見其瞋怒、眼中及口皆有火光、忙怕驚惶、罔知攸措［音酷］。卽分疏曰、「比來但持經、不曾殺人、亦不喫人肉。」便問持何經。答持金剛般若經。著紫之人、聞姚待此說、熙怡微笑、聞稱大善。聲傍忽有人著黄、不見其脚、手把一物、長二尺許、八稜成就、似打鼓槌、高聲唱曰、「何於朱道士房喫肉。」更不敢諱、便承實喫。喫幾許、報喫五六臠。著紫人迴看黄衣人、其人報云、「喫四兩八銖。」卽把筆書槌、耳中遙聞。「事非本心、且放令去。待曹府到日推問。」著紫人又云、「大雲寺佛殿早脩遣成。」應諾走出、可五六步。廳西頭有一人、著枷杻、四道釘鍱、請問姚待。廳上人喚姚功曹迴奴。著紫人問云、「此人讀般若經虚實。」報云是實、答了迴看、但見空枷在地、不見屠兒。待初入時、廳前及門不見有人守掌。及其得出、廳兩邊各有數千人。朱紫黄綠、位次各立、亦多女人。擔枷負鎖、或有反縛者、亦有籠頭者。乃於衆中、見待親家翁張楷、亦在其中、雖著小枷而無釘鍱、叩頭令遣家中造經。不得多語、更欲前進、被人約而不許。其中有一人、散腰露頂、語待急去、此非語處。迴見其人、乃是待庄邊村人張賢者、抱病連年、水漿不能入口。鄉人見者、皆爲必死之談。妻子親情、皆備凶具。姚待覺後、報其兒爲寫經、不踰半旬、病便得差。得放出屏墻之外、門門皆有人捉刀仗弓箭、儼然備列捉。門人不放待出。待所生父、從廳東走來、叫云、「我兒無事得放、何以遮攔不收。」令待展臂示之、卽宣衣袖出臂、便得出。及至覺寤、已經一日。

（校異）

已（改意）―巳
稜（日）―積
槌（改意）―搥
已（改意）―巳

（大意）

梓州、郪県の人である姚待は『金剛般若経』を誦持していた。長安四年（七〇四年）に親の葬式があったので、亡き親のために自ら四大部経の写経を発願し、『法華経』と『維摩経』各一部、『薬師経』十巻、『金剛般若経』百巻（を筆写した）。諸々のお経を書き終えると、（さらに）『金剛般若経』を十四巻書いた。ある日の正午、鹿一頭が突然門に入ってきて、すぐさま通り過ぎて寝台の前に立ち、頭を上げて長机をなめた。長机をなめ終わると、寝台の下に伏した。家に犬が五、六匹いて、鹿を見てしっぽをふるが、恐れて吠えることができなかった。姚待が抱きかかえても（鹿は）なお驚き恐れなかった。（鹿の）ために三帰を受けさせたところ、飛び上がってひざまずき、放しても去らなかった。

先天年間（七一二―七一三年）に至り、諸々のお経を同時に写し終えて包んで保護し、函に入れようとすると、ある屠兒（獣をさばく人）の李迴奴が、どうしたことか突然やって来た。（屠兒は）長机の前に立つと、お経を指さして笑った。合掌して立ち、お経を取ろうとした。その屠兒は話せず耳も聞こえず、両目が赤く、酒におぼれて凶悪であり、このような者はあまりいなかった。（姚待が）書いたお経は、みな、瑠璃を軸棒にしていたが、『金剛般若経』だけが白檀で飾ってあり、（屠兒は）唯一質素な軸を取った。この人が『金剛般若経』に縁あることは明らかであり、そこで姚待は白紙で（『金剛般若経』を）包み、黒い函に入れた。屠兒は手にしている刀を横にして函の上を通過させると、笑って走り去った。去ってからは再び現れることなく、どこにいるか分からなかった。

開元四年（七一六年）に至ってのこと、玄宗観の道士、朱法印は老荘（の道）に至極通じていた。眉州に出向いて講説し、何年か経って、ようやく戻ってきた。その時、同郷の学士二十数名が、挨拶するため（朱法印に）会いに行った。友人の王超の曹府（官邸）にて、竪子（小僧）に羊一頭を殺させ、袋に肉を詰めていた。煮上がった後、これは殺されたものだと知っていたが、しかし、口の卑しさに耐えられず、皆にならって食べてしまった。（ただし）計四、五かけらしか食べなかった。一日が過ぎ、日昳（午後一時から三時）の時に、突然、お腹が熱く、頭が痛くなり、（体中の）関節はまるで（刀で）切られているようだった。黄昏の時に至り、病状が一層ひどくなった。門外から姚待を呼ぶ声が耳で聞こえ、心（の中）では見に出たくなかったが、知らず知らずのうちに体が出てしまった。

何事かと聞くと、黄色い服をきた使者がいて、まるで刀をもった刺史のようだった。召喚の言葉を伝え終わると、（二人は）すぐに行った。門

外の（すぐ）そばには小川があり、（しかし）行こうとした時に、すでに溪澗は見えず、ただ平坦な大道が見え、両側に木がずらりとあった。歩くこと、三、四里、ある大きい城を見ると、（使者は）梓州城だと言った。その城には高い建物がたくさんあって、それらの間に通行する渡り廊下（道路）も複数あり、白い壁に赤い柱で、非常に秀麗であった。（姚待は）さらに使者に聞いた。これは梓州城ではないのではないか。使者は何も話さなかった。

城には五層の門があった。それぞれの門の両側には門屋があって、門と門が向かい合い、各々の門の上に額が掲げてあって、篆書によく似ているように見えるが、その字は理解できない。門の数は多いが、守り（警備）が一人もいなく、町中にも人がいなかった。使者が五層の門のうちに入ると、ある大きな役所の建物があって、（その）廊下のある屋敷は（部屋の天井や柱が）高く、大きな役所の建物および門は、並びに守り（警備）がいなかった。（姚待が）屏墻（大きな役所の建物の中と外とを隔てている小さい壁）の外に至り、盗み見すると、大きな役所の建物の前方に一人がいて、紫色の着衣をし、体つきが少し太って大きく、容姿は端麗であった。三十（歳）以下に見えた。使者が入って言った。「姚待を捕まえてきました。」姚待は歩いて入り、遙拝した。怒った目つきと怖い声で、「なにが原因でお前が連れられてきたのか。清らかなところで人が人を殺めることが許されるのか。（姚待は）驚き、よく考えてみたが、何（について問われている）かがわからなかった。

しかし、彼（紫の着衣の人）はとても怒っているようであり、眼中と口は、みな火花（火の光）を帯びていたので、恐れて驚愕し、どうしたらいいか分からなかった。よって、弁解して言った。「いままでただただお経を誦持してきて、人を殺めたことがなく、また人肉も食したことがない。」すると、何のお経を誦持したかを聞かれた。答えて言うには、『金剛般若経』を誦持したとのことであった。紫色の着衣の人は姚待のこの話を聞くと、和気あいあいとして微笑を興し、大変善いことだと褒めた。

（紫色の着衣の人の）そばに、突然、黄色い着衣の人が現れ、足は見えず、手にはあるものを持っていた。（それは）長さが二尺ばかりで、八稜の形をしていて、まるで鼓を叩くバチのようであり、（黄色い着衣の人は）大きな声で叫んで言った。「どうして朱道士の部屋で肉を食したのだ。」これ以上、隠すわけにはいかないので、正直に食べたことを申し出た。いくら食べたか（と聞かれ）、返事として五、六かけらを食べた（と答えた）。紫色の着衣の人が振り向いて、黄色い着衣の人を見た。その人（黄色い着衣の人）が報告して言うには、「四両八銖を食した。」そして、筆を持ってバチに（何かを）書くと、耳の中で、遠くから（声が）聞こえた。「このこと（肉を食したこと）は、彼（姚待）の本心（本意）ではなく、一時的に帰す令を出そう。王超（曹府）を捕まえてきて問いただそう。」

紫色の着衣の人がまた言った。「大雲寺仏殿を早く修繕し完成させなさい。」（姚待は）応諾し、歩いて出た。約五、六歩、歩いたら、大きな役所の建物の西にある者がいて、首や手足に刑具をつけ、（さらに）四本の鉄片で固定されていた。（ある者は）姚待に問いかけた。（そのとき）大きな役所の建物の前方にいる人（紫色の着衣の人）が姚功曹（姚待）を呼び戻したが、（「待」という下の）名前では呼ばれなかった。その刑具をつ

けている者を見ると、なんと屠兒の李迴奴であった。紫色の着衣の人が尋ねて言うには、「この人が『金剛般若経』をよむことは本当か。」答えて言うには事実とのことで、答え終わって振り返ってみると、刑具だけが床にあり、屠兒（の姿）は見えなくなっていた。

姚待が初めて入ってきた時、大きな役所の建物の門には守りの人が見えなかったが、彼が出ようとした時には、建物の両側にそれぞれ数千人もの人がいた。赤、紫、黄色、緑（の着衣）で、階級に応じてそれぞれ立っていて、また女人も多かった。刑具を担いだり鎖を背負わされたり、あるいは両手を後ろに縛られている者や、または頭絡（馬の頭に被せる緊縛道具）をつけた者もいた。そして、その衆の中には姚待の親家翁（娘か息子の結婚相手の父親）張楷もおり、小さい刑具を付けていたが、（固定用の）鉄片はなかった。張楷は姚待に叩頭（頭を地につけたおじぎ）して、家族にお経を作る（書く）ように伝えて欲しいと依頼した。（しかし）たくさん言葉を話すことは出来なかった。もっと前に行こうとしたが、人（使者）に押さえられて許されなかった。

その（集団の）中の一人は（髪が）腰まで垂れて、頭をあらわにしており、姚待に、急いで去れ、ここは話すところではないと語った。振り返ってその人を見ると、姚待の村の端に住む村人である張賢という者だった。病を患って長年、水も液状の食物も口に入らずにいた。村で見た人は、みな、（彼は）必ず死ぬという話をした。妻・子・親戚・知り合い、みな棺（や葬儀用品）を準備していた。姚待が目を覚ました後、その（張賢の）息子にお経を書くように伝えたところ、五日間も過ぎないうちに、病が直ってしまった。

（姚待が）大きな役所の建物の屏墻（建物の中と外とを隔てている小さい壁）の外に出してもらうと、すべての門に、人が刀をたずさえ、弓と矢を握り、厳然として列をなし（まるで彼を）捉えることに備えていた。門番は姚待を放さなかった。姚待の父親が大きな役所の建物の東から歩いてきて、叫んで言うには、「うちの子は無事に放されている。なにゆえに阻まれ、（放す命令を）受け入れないのだ。」姚待に上腕をみせるよう指示したので、袖をまくって腕を出したところ、出られた。目が覚めるまで（の間に）、すでに一日が経っていた。

11　楊簡

（本文）

有楊簡者、梓州通泉縣人也。洞解楞伽、恒於蜀中講説。又常誦金剛般若。嘗於飛鳥行、日已•將暮、路多猛獸、人皆憚之。簡口誦經、足仍急歩。逢一見鬼者、怪諸鬼崩騰而走、若有所畏、遂見楊簡、誦經而行、諸鬼驚惶、由經之力。則知隨説之處、諸佛之所護持。

（校異）

已（改意）―巳

（大意）

楊簡という者は、梓州通泉県の人である。『楞伽経』を深く理解し、つねに蜀中にて講説していた。またいつも『金剛般若経』を読誦していた。（彼は）かつて飛脚の仕事をしていた。日も暮れようとする頃、道路に猛獣が多くいて、人は皆これを怖れていた。経を読誦し、足はなお急いで歩いていた。ある見鬼の者（鬼の見える者）がいた。（その人は）複数の鬼がばらばらに走っている様子だったのを怪しんだ。（鬼たちは）まるで何かを恐れているかのようだった。やがて楊簡を見かけると、経典を誦して歩んで行くところだった。複数の鬼が驚き呆れるのは、その経（『金剛般若経』）の力ゆえである。すなわちそれは、諸仏の護持するところである。